

なかま

落葉は 動かぬ鹿に 降り積もれ
菊抜くな ブロウするなよ ガーディナー

行事予定表

- 11月2日 Summer Time End 2時AM→1時AM
- 11月2日 新1年募集説明会 1時PM～2時半PM
燦々プロジェクト(理事長講演3時～4時20分)
職員研修(NJ日本人学校教諭による授業)
- 11月9日 総務オフィス会議
- 11月9日 16日 表現学習発表会 14:35～
- 11月23日 表彰式(表現学習発表会入賞者対象)

古本市大盛況お礼

図書係の皆さん、応援頂いた皆さん、図書を提供いただいた皆さん、ご協力を大変にありがとうございます。収益金\$2,574は全額学校にご寄附いただきましたことを報告しますとともに、心からお礼申し上げます。

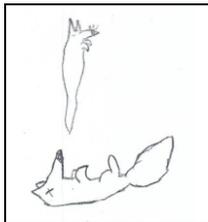
生徒も保護者も大いに楽しみにしている古本市をこれからも盛り立てていただきますように、よろしくお祈りします。

4年生「ごんぎつね」の作文紹介

ごん日記(6場面) 木川大暉

今日もおんがえしをしようと、くりと松たけを兵十の家へ持って行った。置いて出ていこうとすると、せなががいたくなかった。たちまち息もできなくなって、地面に落ちた。

上を見ると兵十が立っていた。兵十は口をあんぐり開けていた。兵十は「△×□○△？」と言いながら、くりを指さしていた。意味は分からなかったけれど、うなずいた。あ～、今日は悲しい日だったなあ。



ごん日記(1場面) 高木 健

今日、おれ、だれかのうちのうらを通っていった。何かいっぱい人が通って来た。そうしきだった。兵十のおかあだった。そうしたらきっと、十日前うなぎを兵十からぬすんだのは、きっとおかあにあげるはずだったのか。おれのせいで兵十のおかあが死んだ。いたずらしなきゃよかったなあ…。

ごん日記(6場面) 小岩夕莉

兵十はやっぱ、こわいな。兵十がぼくのことをちらっと見ただけで火なわじゅうを持って殺すなんて。けど、ぼくがくりや松たけを毎日持ってきたって分かってくれてぼくうれしいぞ。ぼくのことわすれないでね。

プリンストン日本語学校新聞



平成26年度 No.24号

平成26年11月2日

文責 長尾重範 nagao@pcjls.org

「宮沢賢治」ってどんな人? (18) 芝崎雅行
ただ一人の親友 (3)

賢治と保阪寡内(ほさかかない)の5年間の親交関係を読んでみると(菅原千恵子『宮沢賢治の青春』角川文庫)、ここまで密な親友と云うのは、詰まるところ別れるつきやないんじゃないかと。二人の親交関係は云わば「疎結合」なんだよね。一時、がっちり結び合っても、その固定的な結合関係をいつまでも継続するわけにはいかないでしょう。お互い変わってゆくんだから。「疎結合」だったら、なが～く平和に、友好関係を享受できていたんじゃないかと思うんだけど。二人は、「普通の」親友のように、響き合う資質、共有する世界観、切磋琢磨する好敵手の関係を持っていたから、本来、肯定的でバランスのある関係を維持できたでしょ。ところが、そうはならなかった。直接的には、賢治がねちっこく、キリスト教の寡内を、法華経信仰あるいは国柱会入会のため、折伏(しゃくぶく)しようとしたからなんだけど、でもなんで?

実はね、賢治と寡内の間には、ある決定的に重要な体験の共有があったらしいんだよね。それは、1917年7月14日から15日に挙行された二人だけの岩手山深夜の登山での出来事で、具体的にどういことが起きたのか、それはよくは分からないのだけど、それが二人にとって、いかに重要であったかは、その後の賢治の寡内への手紙や、寡内が残した日記から推測できる。その共有体験があればこそ、賢治は「疎結合」で気楽な関係に納まっているわけには行かなかった。菅原千恵子が拾い上げた、賢治の寡内への手紙の断片を引用すると、

—「夏に岩手山に行く途中誓われた心が、今荒び給うならば私は一人の友もなく自らと人にかよわな戦を続けなければなりません」

—「吾々は曾て絶対心理に帰命したではありませんか」

—「曾て盛岡で我々の誓った願

我等と衆生と無上道を成ぜん、これをどこ迄も進みませう」

二人は夕方からたいまつを持って岩手山に上り始め、途中で山小屋かどこかで小休止して仮眠、未明から登頂再開。その途中で、二人のたいまつのは、何かの理由で消えてしまい、暗闇の中、ある種の自然現象で、二人は息を呑む。それが何だったかは分からない。流星が何本も流れたのか。空に電光現象が発生したのか。二人は自然から「啓示」を受けたと断じ、「我等と衆生と無上道を成ぜん」と、彼らの宗教論の中ですでに一致していたこと、人々の幸福のために自らを捧げることが、ある種の歓喜の中で、誓い合った、と。。。これ、あくまで、僕の想定ね。